えどまえ　うみ　まな　わ
江戸前の海　学びの環づくり
瓦版　第23号

東京海洋大学 江戸前ESD協議会　〒108-8477　東京都港区港南4-5-7　東京海洋大学品川キャンパス

品川の漁業を聴く
芝漁業協同組合長 石橋二郎さんのお話

今号は、2020年1月25日に実施した「品川の漁業を聴く会」でのグループ聞き取りの報告で、録音した音声記録を文字に起こし、編集したものです。編集は東京海洋大学江戸前ESD協議会の一員である笠島克恵 さん（ノルウエー在住）にお願いしました。

はじめに

東京湾の内湾は、栄養塩が豊富で浅瀬が広がる穏やかな海域であり、生物の生息に最適な条件を備えていたことから、わが国の沿岸漁業の中でも優秀な漁場の一つでした。現在、東京都港区の古川沿いに屋形船や船宿が連なる金杉浦は、本芝浦と共に東京湾内湾の古くからの漁村であり、江戸時代にはこれら二浦は将軍家に魚を献上する御菜八ヶ浦の元締めとして、江戸前漁業の重要な地位を占めていました。一方、旧目黒川の河口に発達した品川浦は、現在では埋め立てられて東京海洋大学品川キャンパスの裏手の運河のさらに奥となっていますが、江戸時代には御菜八ヶ浦として漁師町を形成していました。昭和になって港湾整備の埋め立てが進む中、東京湾の漁業は大きくその姿を変えていきました。

戦後の芝・品川の漁業について、芝漁業協同組合（芝漁協：東京都品川区）の理事組合長である石橋二郎さんにお話しを伺いました。

戦後間もなくの芝・品川の海

東京湾は昭和30（1955）年まで進駐軍の占領下にあり、竹芝、芝浦、日の出などの埠頭には米軍の食料倉庫が立ち並んでいた。現在東京海洋大学があるところも当時は米軍の駐留地で、一般人の立ち入りは禁止されていた。米軍がいるところには食料が豊富で、その残飯で運河には魚も多く集った。立ち入り禁止区域ではあったが、米軍の廃棄した食料や海辺に集まる魚を目当てに近づく人も多く、米兵に見つかっては石を投げられたり、散弾銃を発砲されたりした。芝の漁協組合員も発砲されて病院に運ばれたこともあったとか。渋谷川（古川）の河口に架かる貨物線路の鉄橋では牡蠣を積んだ船がしばしば米軍に止められ、真珠貝と間違えた米兵が牡蠣を銃底で潰し、真珠がないと言って怒り出すこともあった。このような米軍とのトラブルで、場合によっては一晩拘留されたりすることもあったそうである。

古川の鉄橋から上流の金杉橋までの間には漁師の家が並んでいた（写真1）。戦後まもなくの食糧難の時代には供出制度があり、獲れた魚は各組合が所有する生け簀に集められ、そこから決められた量を国へ供

石橋二郎さんプロフィール

昭和8年に日本橋で生まれる。東京大空襲で焼け出された後、新潟の長岡や茨城の下舘など各地を転々とする。戦後、金杉の「あみ熊」に奉公に上がる。金杉近辺では、代々漁師として生計を立てているところが多く、石橋さんもそこで漁師として独立する。以来70年以上、芝・品川で漁業に携わっている。

写真1. 金杉橋浦の船だまり（東京海洋大学附属図書館 東京湾アーカイブズ 江戸前漁師 鈴木家の写真より）同図書館所蔵.

出させられていた。金杉の組合も金杉橋の上流にある事務所の横に5mほどのコンクリート製の生け簀を持っていた。漁師は自分の家の裏からそれぞれ舟を出して漁に出かけており、供出制度はあったものの、漁獲物には獲れた先から買い手がつくといった状況であった。（芝や金杉も含めて）東京には組合が管理する市場や漁港がなく、漁師同士の結束もそれほど強いものではなかった。他人に漁場を知られないために、漁は人目を忍んで夜こっそり行われ、近所を歩くときは音のする下駄は脱ぎ、手漕ぎの帆かけ舟で静かに漁に出かけていったそうである。舟にはエンジンも積まれてはいたが、燃料も不足していたので、緊急時以外は使用しなかった。

戦後の漁業

海苔の養殖　当時、東京湾で漁業と言えば海苔を指すほど、海苔の養殖は盛んであった。東京都の管轄区域は東京東部から多摩川尻までで、空いている海面は海苔簀（ひび）でほぼ埋め尽くされていたという。

もともと芝漁協では投網やはえ縄が主流であったが、次第に漁の合間に海苔も始めるようになった。しかし、ゼロから本格的に海苔の養殖を始めるには資本が足りず、漁も続けながら他の組合との共同で行われた。海苔は網簀を竹竿で固定するのであるが、芝の区画であったお台場の沖などは、海苔の養殖が盛んであった大森漁協に任せていた。というのは、お台場の沖5kmほどのところでは竹竿一本丸々埋まってしまうくらいのヘドロが溜まっており、竹竿を2、3本繋げる必要があったのだが、芝漁協は竹を大量に積めるほどの大きな船はなかったのである。資材が豊富な大森漁協と契約し、それで事業が成立していた。

資本は十分でなかったものの、芝漁協の青年部は養殖方法の改善に取り組み、海苔の網を張るのに適した水面の高さや潮流などを、瓶を海面に浮かべて熱心に研究し、八段線と呼ばれる方法を開発した。それによって、毎年講師として全国に指導に行くまでになった。今でも地方の組合には当時の芝漁協の優秀旗が飾られているところもあるらしい。

芝の組合による海苔養殖は、11月に始まる。千葉側で海苔の種つけを行い、種がついた網を東京側に持ってきて広げ、それを2月ごろまで行う。それが終わると、次は江戸前の海苔であるアサクサノリや別名赤目とも言われる真っ赤なスサビノリを始める。アサクサノリやスサビノリは天然もので、自然に網についてくるのであるが、スサビノリは古い網にはつかず、2、3回収穫したら終わってしまう。採れる量が少ないので市場にはあまり出回らなかったようである。現在の海苔の養殖では種をつけた網を冷蔵保存し、シーズン中何回も網を入れ替えることができるが、当時は網を張るのは一度きりで、何らかの原因で網に支障が生じればそのシーズンは諦めるしかないという効率の悪いものであった。

進駐軍が撤退すると晴海、豊洲、品川の埠頭の建設など、東京港の整備が始まった。それまで、採れた海苔は各漁家の軒下などで干されていたが（写真2）、東京の各組合は品川埠頭全体を借り受けて海苔の干し場として利用するようになる。埋め立て当初の品川埠頭は、雨が降ると沈んでしまうようなグズグズな状態で、一応道路はあったものの、車が入ってこられるようなものではなかった。港南大橋はまだできておらず、埠頭に架かる埠頭橋を中心に主に船で行き来をしていたようである。

海苔の時期には（石橋さんは）早朝、海苔を干してから漁に出ており、自宅の金杉には戻らず、埠頭に立てた仮小屋で生活をしていたという。埠頭での住宅建設は禁止されていたが、埠頭全体を組合が借り受けていたので、大きな問題となることもなく、漁業者の仮

漁業協同組合

東京の漁業協同組合は現在、大田、芝、港、佃島、中央隅田、東京東部の６組合であるが、昔は多くの組合が存在し、品川だけでも３組合、東部でも６組合があったという。港漁協が芝漁協から独立、港漁協からは金杉の「金」と芝浦の「芝」をとった金芝漁協組合が独立するなど、組合は分裂・統合を繰り返し錯綜していた。現在は古川から立会川の漁師の80%は芝漁協に所属、残りの20%はあちこち点在して港漁協に所属している。

写真2. ノリ干しの様子（東京海洋大学附属図書館 東京湾アーカイブズ 江戸前猟師 鈴木家の写真より）同図書館所蔵.

小屋が何軒か存在していた。埠頭には電気は通っていたが、水道がなかったので、水の確保には苦労をしたそうである。近くの船宿や工場に貰い水に行き、船いっぱいに積んできた水をドラム缶に詰めて使っていたが、積んできた船の油が染み込んで飲料水には使えなかった。土地が石橋さんの名義になるまで、水道のない不便な生活を続けていた。

江戸前海苔

浅草海苔の養殖は江戸時代から名高く、昭和30年代に至るまで全国生産高に占める東京湾内の海苔生産の割合は第二位であった。石橋さん曰く、東京は水が甘い（=塩分が低い）ので、11月はじめごろの海苔はつるっとした良質ものが採れたという。それ以降になると栄養が多すぎるためか、東京の海苔はふかふかして厚くなってしまう。海苔茶箱には普通１帖を縦にして15枚入るが、東京の海苔は分厚くガサガサで10枚しか入らないので値段も安い。

海苔以外の漁業　芝漁協では、投網でのボラ漁、竹筒などによるウナギ漁も盛んに行われていた。ボラ漁は冬で、脂ののったボラが幾重にも重なってひとところにかたまっており、海面が真っ白になるほどであった。海苔簗の上に網を投げても魚が多くて投網が沈まないので、海苔簗には引っかからなかったという。冬のボラはマグロに引けを取らないほど美味しく、寿司屋も買い付けに来ていた。

お台場の隣の品川沖は芝漁協のウナギの漁場であった。漁期は夏で、川へ上って行くウナギを捕獲していた。笹を束ねたボサ、もしくは竹筒を何個かくっつけて海底に固定するか、または、物干し竿などと呼ばれていた鎌で捕っていた(写真3)。座り鎌と呼ばれるものは座って使うもので長さは2mほど、それより深いところは杉や松の丸太を削って使った。漁具を作るところはなかったので、鎌の柄は櫓を作っている会社に、鈎(かぎ)の部分は鍛冶屋で作ってもらったという。鎌では船のエンジンを使わず、船の前にカギを突っ込み、後ろへ返してウナギを捕るという、人力での作業であった。5mくらいの深さまで差し込んでかき回すので、ある程度の大きさの船でないとひっくり返ってしまう。ゴムのチューブが引っかかる感覚がウナギとそっくりなので、よく間違えたそうである。ボサでは一回、30～50キロ、鎌の時は10キロほど獲れた。

石橋さんの家では、主に刺し網によるハゼ漁やスズキ漁を行なっていた。ハゼの漁場は羽田沖で、27～28cmほどの大きさのものが獲れていた。漁期は11月、刺し網で持ちきれないほど獲れた。40cmほどもある尺ハゼや雨が降るたびに大きくなるという夏ハゼも多く生息し、東京湾でハゼがいないところはなかったそうである。後年、漁場はお台場に移して、はえ縄でハゼを獲るようになったが、大量に獲れたもののハゼ自体の大きさは小さくなってきたとのこと。

海苔の補償・漁業権消失

昭和30年代の半ばをすぎると東京湾の漁業に大きな変化が現れる。昭和31(1956)年の東京港の改訂港湾計画によって、港の整備事業が漁業に優先されることは決定していたが、漁業者(17の漁業協同組合、4000人あまり)との交渉は難航していた。昭和36(1961)年には内湾漁業対策審議会が立ち上げられ、東京都と漁業委員との度重なる議論のすえ、翌年1962年に協定書が調印された。これによって内湾での区画漁業権が消失し、補償金の支払いや登録番号の没収を条件に10年間無利子の転業資金の貸付が実施される。盛んであった海苔の養殖に終止符が打たれ、海苔の養殖場であった浅瀬の埋め立てが始まる。この時期、漁師には補償金が入ったとのことで、漁獲された魚が買い叩かれることもあったようである。昭和43(1968)年には外湾の区画漁業権も消失し、組合による漁業権がなくなった。地域における漁業権がなくなったので、東京湾、特に湾奥での漁業はできなくなったと思われる節があるが、現在でも自由漁業という形で漁業は続けられている。

写真3. ウナギを獲る漁具の鈎を持つ石橋さん（東京海洋大学係船場にて）. 鈎は東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムに寄贈していただいた.

転業資金を受けた人の中では、釣り船を新調して漁に関係のある仕事を続ける人が多数見られた。湾奥ではハゼ釣りも盛んで、毎日10～15人を乗せた釣り船が12～13cmのハゼを平均100匹くらい釣り上げていた。しかし、転業資金の貸付の条件が漁船登録番号の没収であるということがしっかりと理解されていなかったことから、転業資金返済の時期が近づくと、登録番号の消失に関しての混乱が生じた。現在、組合では、自分の船を持ち、組合に加入している人で年

間90日以上の仕切書（市場に魚を出しているという証明書）を持っている人には登録番号を発行している。

湾の汚染と東京都の漁師

高度経済成長期に伴う東京湾の埋め立てと工業地帯の発展によって、東京湾の汚染が進み、昭和45（1970）年にはそのピークを迎える。河川からの有毒物質の流入により、東京都では10年間、漁獲及びその販売を禁じた。行政区分を超えて東京湾の汚染は進み、神奈川でも海底に50cmほどコールタールが堆積していた。そのため底魚の販売は禁止、また、多摩川からの汚染物質の流入により、築地では川崎の魚は買わなくなった。しかしその一方では、出荷規制がなされなかった千葉では、千葉の漁師が東京の海で獲れたものを地元で出荷するという事態が起きていた。大きなカレイなど、一晩でかなりの漁獲を得ている千葉の漁師を東京の漁師は黙って見ているしかなかった。

行政の杓子定規の対応は、江戸川における東京都の対策にも見られる。千葉と東京の境を流れる江戸川で、東京側から中毒が発生した。そのため東京都では、船で天ぷらを出すならまずは料理屋を営業し、その仕出しとして船に積み込むことを義務付けた。そこで、まずは保健所で飲食業に必要な講習を受け、家も飲食業に対応できるように改築し、そしてやっと天ぷら船という特殊な業種として許可を得ての営業であった。千葉県も江戸川を共有しているので、講習の際には関係者に声をかけたものの、保健所では、「あっ、千葉県の人は帰ってください。おたくのほうは害がないですから」と追い返される始末であった。天ぷら船という業種はまだ残っており、3年ごとに講習を受けて続けられている。

補償もなく休漁を余儀なくされた漁師たちはその間、市場や港湾の倉庫での区分けなどをして働いた。石橋さんは一時、測量会社に入って、東京湾岸の火力発電や各地の原発の建設予定地など、日本全国を測量して回っていたという。

現在の芝・品川の漁業

東京湾の埋め立ては時代とともにどんどん進み、今では10mより浅いところはほとんど無くなった。東京の海水面自体も減り、通行禁止区域も増えて漁船が安全に通行できなくなってきている。新海面の埋立地が増大していくに連れて荒川、中川、江戸川からの水流が変化して海水の流入が減り、また、水面と垂直に建てられた埋立地は生き物の生息を阻んでいる。昔、海面を埋め尽くしたボラも、今では三番瀬でも三枚洲でも全く獲れなくなってしまった。

事態の改善のため、組合では生き物を増やすために浅海域を作って欲しいとの要望を出しているが、今や浅瀬を作る場所がない。稲毛に作った砂浜は、残念ながらその沖を深く掘り下げてしまったので、その穴に溜まった硫化水素で頻繁に青潮が起きるようになってしまった。掘り下げてしまった穴は、20年の歳月をかけてもなかなか埋まらず、その間カレイやシャコなどの底魚は大きく減少してしまった。

以前どこにでもいたハゼも大きく減少し、千葉の方にいた大きな尺ハゼは姿を消した。さらに、ハゼが産卵する11、12、1月に航路の浚渫が行われるので、卵ごと持っていかれてしまう。今獲れるハゼは小さく、量も少ない。芝漁協でハゼ漁をするのは今や石橋さんのみである。獲れたハゼは家族・知人用で市場に出荷はしていない。ハゼの刺網漁の衰退によって漁労技術も失われ、ひいてはハゼの食文化も消滅してしまう可能性も大きい。

一旦壊れてしまった漁場を再生するのは非常に難しく時間もかかる。しかし、一方で、底魚やシジミなど、減少・消滅して行く魚種とは対照的に、増えている魚種もある。カマスやクロダイなどの浮魚が増加し、東京湾の生態系自体も変わってきているようである。

（この号、了）

漁法由来の屋号

石橋さんが奉公に上がった「あみ熊」は、投網の実演をして獲れたものを料理して出していた。あみ熊の「あみ」は投網の「あみ」からきている。投網をやっていた漁家には他にも「網長」、「網定」などの屋号が付いている。また、「縄安」、「縄徳」などと名前に「なわ」がつくところは昔、はえ縄をやっていた漁家である。

木船

海苔の養殖に使われた親船やべか舟、投網船など、当時の漁船はほとんどが木船であった。船の外側には杉、内側には檜が使われ、船内は鰻屋で廃棄される脂の混じった灰でピカピカに磨き上げられた。履物を履いて乗ることは許されず、船の上では漁師は冬でも裸足であった。投網船には船首に踊り場があり、網を打つときにはそこにむしろを敷いて滑らないようにしていた。動力は、昭和30年代までは櫓と帆かけが一般的で、その後、焼玉エンジンが使われるようになった。現在の船ほど速力がなかったので、木更津の方へ行くにも５時間ほどかかり、千葉へ行って日帰りすることは難しかった。べか舟も曳いて行くと時間がかかるので、親船に乗せて運ばれていた。

発行　江戸前ESD瓦版編集委員会
〒108-8477 東京都港区港南4-5-7
東京海洋大学海洋科学部江戸前ESD事務局内
電話/FAX　03-5463-0574（川辺研究室）
電子メール　kawabe(a)kaiyodai.ac.jp
（メール送信時には(a)を@にしてください）
ホームページ
http://www2.kaiyodai.ac.jp/~hirokun/edomae/index-esd.htm